

くわしたじょうあと
桑下城跡

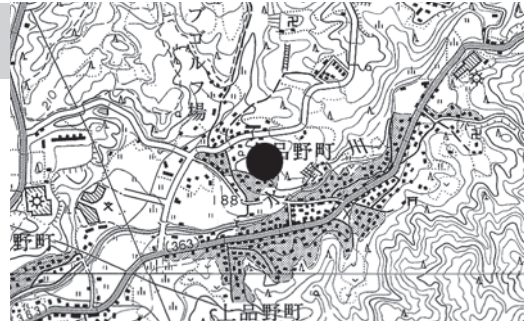
所在地 瀬戸市上品野町
(北緯35度15分24秒 東経137度08分19秒)

調査理由 国道363号改良工事

調査期間 平成21年9月～22年1月

調査面積 2,100㎡

担当者 小澤一弘・宇佐見守・伊奈和彦



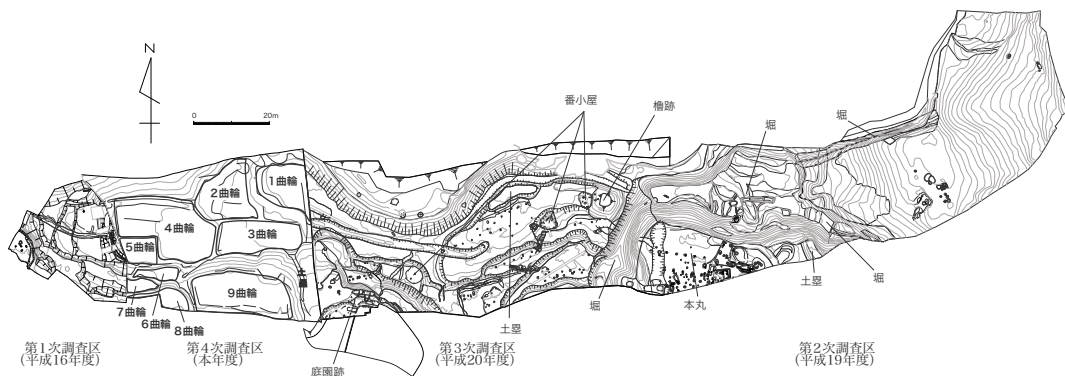
調査地点 (1/2.5万「多治見・猿投山」)

調査の経過 調査は、国道363号線の改良工事に伴う事前調査として、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。今年度の調査は、平成16年度、同19年度、同20年度に続く4回目の調査である。

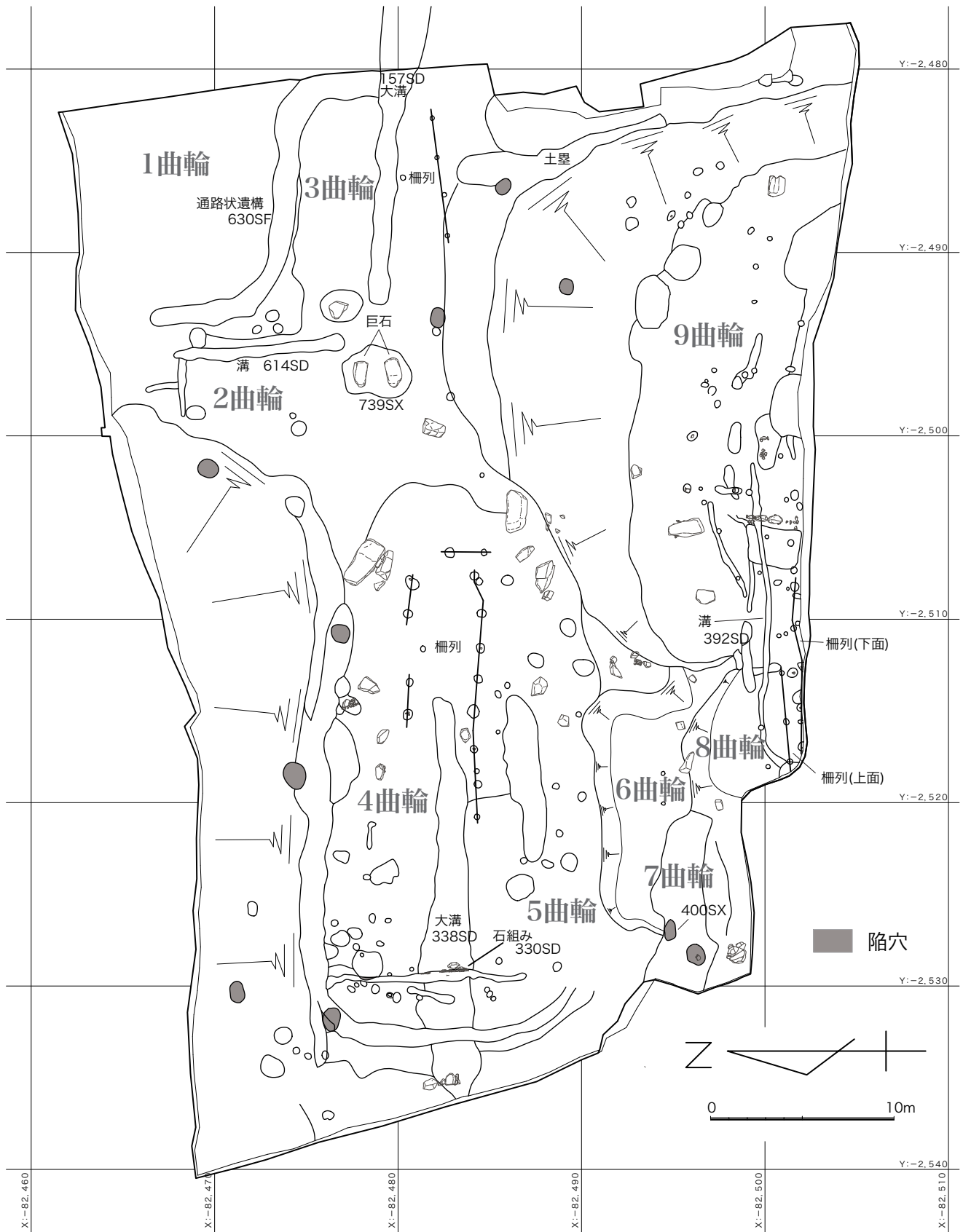
立地と環境 桑下城は、瀬戸市北東部にある品野盆地の北東、標高210m前後の丘陵上に立地する平山城で、東西約220m、南北約100mの規模が推定されている。南東の水野川を挟んだ標高約330mの尾根線には品野城が存在する。江戸時代の地誌類によれば桑下城は品野城主松平内膳(信定)の家老である永井(長江)民部の居城とされているが、昨年度までの調査によって今川氏が城の改築に関与した可能性が高いと考えられる。

調査の概要 今回は、昨年度調査区の西側、曲輪と考えられる平場を中心とした調査となった。平場は9ヵ所確認でき、1曲輪から9曲輪と仮称して調査を進めた。調査区南に位置し面積約250㎡の広さを測る9曲輪では良好な遺構を検出した。なお、1～7曲輪までは明確な時期差が確認されず1面、8曲輪は2面、9曲輪は3面の調査となった。

- 1 曲 輪** 1曲輪は、調査区最頂部に位置する。2曲輪・3曲輪との間は明確な段差となっており、曲輪を囲むように西辺から南辺に沿って通路状遺構(630SF)を検出した。
- 2 曲 輪** 2曲輪は、1曲輪との間の斜面裾に沿って溝(614SD)を検出した。3曲輪との間には明瞭な段差はなく、築城時には3曲輪と一体の曲輪であったと考えられる。
- 3 曲 輪** 3曲輪は、昨年度調査区から続く大溝(157SD)が曲輪中央まで延びていた。曲輪中央で上面を水平に保つように据えられた巨石(739SX)を2個検出した。石の下から大窯期の灰釉皿などが出土している。曲輪南端の崖際に柵列と考えられるピットを4基検出した。
- 4 曲 輪** 4曲輪は、中央で平成16年度調査区から続く大溝(338SD)を検出した。溝は最大幅3.10m、最深部までの深さ1.04mの箱堀で、形状から通路とも考えられる。また、曲輪西端でこの溝を埋めた後に掘削された溝(330SD)から土留めと考えられる石組みを検出し



桑下城跡発掘調査区全体図



平成21年度調査区遺構平面図 (1:300)

た。曲輪東には大溝(338SD)が途切れる辺りから柵列と考えられるピットがコの字状に展開する。

8 曲 輪 8曲輪の南側は盛土されており、盛土の上面と下面で東西方向へ続く柵列を検出した。下面の柵列と溝(392SD)は、9曲輪第3面へ続いており、築城時には9曲輪と一体の曲輪であったと考えられる。

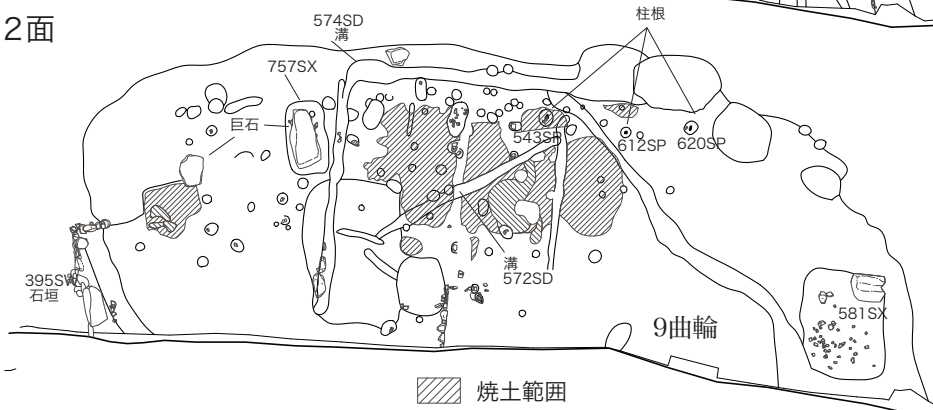
9 曲 輪 9曲輪の中央部分で、火災が起きたと考えられる焼土や被熱した石が出土し、火災後の整地面(第1面)、焼土が広がる面(第2面)、築城当初と考えられる面(第3面)を確認した。

第 1 面 第1面では、曲輪中央で南北方向に走る石組みの溝(435SD)を検出した。石組みに使われている石の中には被熱したものが見られる。溝からは鳥形水滴、猪形水滴、合子などが出土した。南部には東西方向から南北方向へと直角に折れ曲がる溝(432SD)を検出し

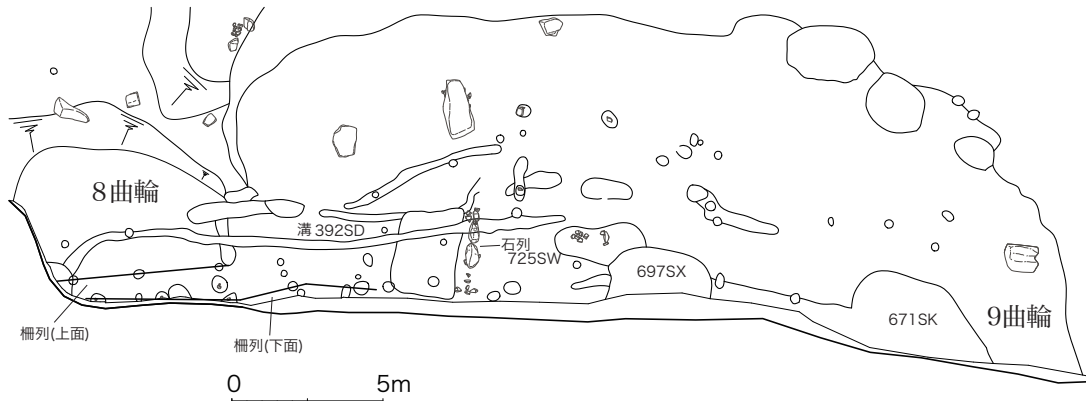
第1面



第2面



第3面



9曲輪遺構平面図(1:250)

た。東西方向部の北側部分のみに石が組まれている。溝の中は焼土や炭化物で埋まっており、直接火を受けたと思われる部分もあった。北東部で石組みの井戸(504SE)を検出した。石組みは北側のみに残り、検出面は長径2.75m、短径2.00mの楕円形で、最深部までの深さは0.91mを測る。石組みに大窯期の焼台が使われてい



9曲輪から出土した水滴・豆天目・合子

た。出土遺物は豆天目、茶入、水滴などの大窯製品の他、茶臼、鉄製刀子、ガラス製数珠玉、中国産染付碗などが出土しているが、土師質の鍋など日常生活用具は少ない。

第 2 面 第2面の南側は1m以上の盛土がされており、曲輪全体で大規模な造成が行われたことが分かる。曲輪中央の焼土が広がる部分で掘立柱建物の柱穴と考えられる複数のピットを検出した。また、焼土の広がり北西部分には建物を囲むL字状の溝(574SD)を検出した。この溝の西側には上面が平らな巨石が2個出土した。757SXの巨石(上面1.96m×0.81m)は地山を掘り込んで据えられ、上面を水平にするために根元には石が並べられていた。焼土の広がり中央部分に軸線の異なる溝(572SD)を検出した。溝の中は焼土塊が多数埋まっており、溝の底部から鳥形水滴や匣鉢、銅製金具が出土した。また、この溝の東側の焼土層から豆天目が、南側の炭化物集積部分から毛彫りが施された鋤形台が出土した。南東角に岩盤を隅丸方形に掘り込んだ土坑(581SX)を検出した。検出面は長径3.65m、短径2.76mの長方形で、深さは0.58mを測る。水を溜めるための施設と考えられる。8曲輪との境で幅3.78m、最大高1.48mの石垣(395SW)を検出した。石垣は垂直に立ち上がって平行を意識して石が組まれ、裏込石がなく、古い時期の石垣の特徴を有する。

第 3 面 第3面では、曲輪西端から東へ全体の3分の1程の位置に南端から北方向へ約3mの石列(725SW)が見られる。この石列を境にして西側と東側とでは地山の様相が異なる。東側は南方向へと大きく落ち込んでおり、南端に大型土坑2基(671SK、697SX)を確認した。西側は8曲輪へと岩盤が続いており、一体の平場だったと考えられる。出土遺物は平碗、直縁大皿、耳付水注、卸目付大皿、仏餉具など古瀬戸製品が多い。また他には東濃型山茶碗や中国産染付碗が出土している。

縄文時代の陥 穴 その他、桑下城築城以前と考えられる土坑を複数検出した。これらは地山を掘り抜き底面中央に小ピットを伴っており、縄文時代の陥穴と考えられる。なお、7曲輪の土坑(400SK)からは石鏃が、9曲輪からは細石核や石鏃が出土した。

ま と め 桑下城跡では、昨年度までの調査により、本丸周辺が侵攻勢力である松平氏や今川氏によって大規模に改造されているのに対して、本丸西側の小曲輪群は築城当初の形状を残し、在地領主である永井(長江)氏の居住域であったと考えられていた。今年度の調査で、築城時の遺構面と考えられる古瀬戸製品が主に出土した9曲輪第3面を確認したことにより、このことが裏付けられるとともに、その後の石垣を伴う大規模な造成や、動物形水滴・豆天目などの特殊な遺物が豊富に出土したことから、9曲輪がその後も重要な場所として利用されていたと考えられる。

(伊奈和彦・宇佐見 守)



調査区全景（上空から）



4曲輪の柵と大溝 (338SD)



8曲輪と石垣 (395SW)



9曲輪第1面（北から）



9曲輪第2面（東から）



9曲輪第2面の焼土（北から）



9曲輪第3面（東から）



9曲輪の巨石（北東から）